

書教育研究会

部長 塚本真也
研究主任 丹羽ひとみ
部員数 16名

1 研究主題

子どもたちの関わり合いを重視し、
基礎基本の定着を図った書の指導

2 はじめに

書の時間というと、一般的には、子どもたち一人ひとりが手本を見て文字を書き、各々が技量を高めるといったイメージが強い。しかし、そこへ学び合いの理念を取り入れ、基礎基本を身につけさせることはできないだろうかという考え方のもと、研究主題を定めた。そして、関わり合いを大切にしながら、子どもたちが意欲的に書の学習に取り組み、基礎基本を身につけるためには、どのような手立てが必要なのか、考えを深めることにした。

3 研究経過

4／2 3 顔合わせ・組織決め・研究の方向性についての検討
5／ 7 前年度までの研究報告・研究主題の決定
6／1 1 実践交流
7／ 2 実践交流
9／1 0 実践交流
10／ 8 実践交流（中間発表）
11／1 2 実践交流
1／1 4 実践交流
2／ 4 実践交流・本年度の研究のまとめ・来年度の構想

4 研究の概要

(1) 座席の工夫

書の授業においても、小学校低学年であればペア、中学年以降であればグループ隊形にするなど、学年や活動内容に応じて座席を工夫することで、子どもたち同士の関わり合いが生まれる。4つの机を「風車の隊形」にして学習に取り組むことも効果的である。

(2) 授業内容のアイディア・工夫

ア 基礎基本の習熟

小学校低学年において、文字を書くための基礎基本を押さえることは重要である。わかりやすいように、合言葉を使うなどしながら正しい姿勢や鉛筆の持ち方を示し、お互いに確認し合うことによって、より意識が高まると言える。また、書くときの力の入れ具合が難しい低学年の子どもたちにと

って、「はらい」や「むすび」などの運筆練習は、有効である。グループで力を合わせて取り組む視写など、子どもたちが楽しみながら意欲的に書の学習ができるような工夫も必要である。

イ 手本への書き込み

「とめ」「はね」「はらい」など、気をつけるポイントを手本に書き込むことで、意識して文字を書くことができる。また、手本を注意深く見る力も養われる。

ウ 相互批正

手本と友達が書いた文字を見比べ、よいところを見つける活動を取り入れることで、子どもたちは互いのよさやがんばりを認め合い、次への意欲へつながる。的確な批正ができるよう、段階に応じた支援が必要である。

(3) 教材・教具の活用

ア I C T 機器

教室に整備されているタブレットやプロジェクターを使うと、手本や子どもたちの作品を大きく映し出すことができる。タッチペンで書き込んで示すこともでき、全体で考えを共有することができる。

イ 水書用紙・水書筆

準備や片づけが簡単で、墨で汚れることがない。手軽に取り組むことができ、筆の感覚を味わうことができる。乾くと、書いたものが消えてしまうので、写真を撮るなどして残すと良い。

ウ 筆ペン

小筆の感覚や筆の運びを感じながら、毛筆に親しむことができる。筆ペンを使った授業をきっかけに、自分の筆ペンが身近にあることで、気軽に書を楽しむことにつながったという実践報告もあった。

5 今後の課題

正しい姿勢や鉛筆の持ち方の指導から始まり、毛筆の技能や手本を見る力の育成など、小学校からの積み重ねが子どもたちの書の力を育む。そのため、今後、ますます小学校と中学校が連携を図り、系統的に指導していく必要があると考えられる。

授業の中で「子どもたちが関わり合う時間」と「個々が書く時間」をいかに確保していくかについては、今後も実践交流や情報交換をしながら、研究を重ねたい。

また、来年度より実施される新学習指導要領では、小学校1・2年の書写の授業において水書による毛筆の学習が導入される。それを踏まえた上で、さらなる実践に取り組み、よりよい授業づくりに励みたい。同時に、子どもたちが書に関心をもって楽しむことができるような支援についても考えを深めていきたいと思う。